
竜の導き

ヒロハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の導き

【Nコード】

N4264W

【作者名】

ヒロハル

【あらすじ】

時は中世ヨーロッパ。小国ヴァルザニアは近隣諸国の侵略に怯えていた。時勢を重く見た王は、古き言い伝えに従い、竜の神の元を目指し、危険を顧みずひとり旅立つことを決意する。王は竜の神との間に、自らの命と引き換えに、竜の力を借りるといふ契りを結ぶ約束は果たされた。

竜の力によりヴァルザニアの国は列国の支配から守られ、平和の訪れに国民は歓喜の声を上げた。

しかしこの勝利が、ヴァルザニアの未来を大きく変えていくのもの

になることは誰の想像にも及ばなかった。

十二年後のヴァルザニア。

城下町の居酒屋で育った少女アンナは、エリート部隊と呼ばれる竜騎士に憧れていた。もちろん、彼女は入隊を望んでいた。

竜騎士になるには過酷な試験を突破しなければならぬ。入隊後も厳しい訓練が待っていた。しかし最も彼女の望みを阻んでいたのが、入隊条件の第一が「男」であることだった。

序章 - 1 - (前書き)

9 / 1 1 序章 - 1 - に追記を致しました。

中世ヨーロッパ。

小国ヴァルザニアは、プロメキア、ガザール、コルドの三大国に囲まれ、その侵略に怯えていた。それぞれがヴァルザニアを呑みこみ、力を強化することで他の二大国を手中に収めようと企んでいたからである。

時勢を重く見たヴァルザニア国王は祖国防衛のため、軍事力の強化を図ることにした。

当時の武器と言えば、剣、槍、斧、弓といったものが主で、大砲こそあれど、人々が身につけて持ち歩けるような小型の銃火器は未だ完成していなかった。

同じような武器を揃えたところで、ヴァルザニアの劣勢が変わるはずはなかった。

王は大臣たちを集め、意見を求めた。

我れ先にとばかりに大臣たちは進言したものの、いずれも有力なものではなかった。

王は、先程より沈黙を続ける最も年老いた大臣であるディムに意見を求めた。

ディムは先代の王より仕えてきた大臣で、王家より賜る信頼は誰よりも厚い。しかし若い大臣たちに王 国の政を託すべく、自ら口を開くことは控えていたのである。

王の問いに対して、ディムは白い髭に覆われた口をゆっくりと動かした。

「竜の神に力を借りなされ」

ヴァルザニアの北に高くそびえ立つ竜の山、その頂きには竜の神

とその下僕である竜たちが住むと、古くからの言い伝えである。竜の神は、自らの元へ辿りついた勇ましき者にはその偉大なる力を貸すことさえ拒まぬとのことだ。

但し、山へは一人で登らねばならない。そしてそれが容易いことではないのは誰もが知っている。頂きに辿りつくまで如何ほどの時を要すかもわからぬし、先人の通った軌跡もない。人肉を食らう獣も潜み、心を惑わす魔女も時に姿を現すと聞く。

かような険しい困難を潜り抜けて、頂きに辿りついた者こそ真の勇者として認められるのだ。

嘘か真かもわからぬ言い伝えのために、王を危険にさらすわけにいかぬと、他の大臣たちは反発した。しかしそれを黙らせたのは、他でもない王自身であった。

「ヴァルザニアの長たる私が祖国のために命を懸けずして、誰が命を懸けようか。案ずることはない。必ずや頂きに辿りつき、竜の神に我を真の勇者と認めさせると約束しよう」

デームはかつての幼な子がかくも偉大に成長していたことを知り、静かに微笑んだ。

旅立ちの日は来た。王は竜の紋章が刻み込まれた甲冑を身に纏い、威風堂々と愛馬へ跨った。武器は短剣と長剣がそれぞれ一本、弓、矢が十数本。食物は十日分である。過度の荷を備えることはむしろ負担となると考えたのだ。

「デームよ。アデルを頼む」

「はっ、仰せの通りに」

アデルとは、王が今は亡き妻との間に授かった、まだ歩くことさえできぬ幼き王子である。言うまでもなく、王はいずれ、その座をアデルに譲るつもりであった。その日まで命を失うことも、国を滅

ぼすこともしてはならぬという誓いを胸に王は手綱を握った。

「行くぞ！ ハッ！」

王が駆る馬に、五人の親衛隊が続いた。山へ入ることはできなくとも、せめて『竜の門』までは王を守りたいという意志からである。

竜の門。

二対の巨大な岩が対象に並ぶ、文字通り、山の門である。初めてここを訪れた親衛隊の一人は噂以上の存在感に思わず息を飲んだ。

「お前たちはここまでで良い。後は私が一人で行く」

王は親衛隊にそう言い残し、前へと進んだ。しかし親衛隊の中でも最も若いバイロンは王の言葉に背き、馬を進めた。

「殿下！ やはり私は最後までお供いたします！」

「来てはならぬ！」

王がそう叫んだ瞬間、頭上より岩が群れとなって襲いかかってきた。王の乗った馬は辛うじて岩を避けたが、バイロンは無残にも下敷きとなり、命を落とした。王は残る親衛隊に向かい、声を荒げた。「見よ！ もはや試練は始まっておるのだ。これ以上、お前たちが進むことは私が許さん。ただちに引き上げよ。良いな！」

王は再び馬を進めたが、もはやその後には続く者はいなかった。

（バイロンよ。お主の心、確かに受け取ったぞ）

流れる涙を拭うことさえせず、王は馬を走らせた。

鬱蒼と茂る樹木を縫うように王は馬を進めた。如何ほどか登ったところで、自然が作り出したと思われる小さな泉を見つけ、しばし休むことにした。

王が泉のほとりに屈みこみ、清らかな水で口をすすいでいたときである。背後で突然、樹木のきしむ音がした。振り返った王に向かって、そばに立つ樹木が倒れ掛かってきた。

（いかん！）

王は素早く身を転がして、どうにかそれを避けた。しかし安堵し

たのも束の間、傍らに立つ別の樹木が襲いかかろうとしていた。王は馬に飛び乗り、鞭を入れた。馬を前へ出すことで二本目の木もやり過ぎた。

休む暇はない。右、左、前、後ろ……次から次へと倒れてくる木を、王は馬を巧みに操り、流れる風のごとく、軽やかに交わしていく。この王、近隣諸国の名手の集う馬術大会で何度も優勝するほど、馬の扱いには長けていた。

迫り来る倒木の群れから逃げ延びた王が背後を振り返ると、まるで嵐が過ぎ去ったかのように、おびただしい数の樹木が地にひれ伏しているのが見えた。樹木の幹はいずれも、まるで刃物で切ったかのように綺麗に裂けている。とても自然の仕業とは思えない。

裂け目を観察しようとした王は、地を這う植物のツルが馬の脚に絡み始めていることに気付いた。ツルは馬体を丸ごと飲み込まんばかりの勢いで四方八方より伸びている。

王は素早く剣をふるい、ツルを切り落としたが、ツルは次から次へと再生し、馬体を地中へ引き摺り込もうと絡みついてくる。

(ここでも休ませては貰えぬか)

王は軽く苦笑いを浮かべた後、再び先を急いだ。

日が沈み、カラスが死肉を求めて鳴く声ばかりが耳に付くようになった頃、王はようやく一息付くことができた。

馬を降り、横たわる大木に腰を下ろすと、自然と溜息が出た。火を起こすと、食料を口にした。突然、襲いかかる試練にたちに対応できるよう、食い過ぎず、少な過ぎず、適度なものに済ませておいた。

辺りを一睨みした後、王はそのままの姿勢で目を閉じた。先を考えると、例え僅かでも休めるときに休むのが得策であった。

カサカサと風が木の葉を揺らす音で王は目を覚ました。まだ薄暗くはあるが、確実に日は昇っている。しかし寢室のベッドで迎えるような、穏やかですがすがしい朝ではなかった。張りつめた空気に気が付き、王はゆっくりと立ち上がって声を上げた。

「出てくるが良い！」

王の言葉は静かな森に木霊したのみで、何も起きない。思い過ぎなどではない。何者かの気配を王は感じていた。

「私はお前たちの敵ではない」

再び王の声が木霊する。

しばしの時を経て、弓を構え、矢を引絞った小人が一人、姿を現した。身の丈は四尺（約1.2m）ほど。革製の衣服を纏い、木彫りの面を被っているため、その表情までは窺い知ることはできない。それを合図としたかのように、次から次へと別の小人が姿を現した。皆、王に向かって弓や槍を構えている。その強烈な警戒心から王は彼らが身を潜めているのを見破ったのだ。

「武器を仕舞ってはくれぬか？」

言葉が通じないのか、彼らが従う様子はない。

（戦うしか手はないのか。ここでのんびりとしているわけにはいかん）

王が剣の柄に手を掛けた瞬間、前に進み出てくる小人がいた。他の者のように武器は持っていない。木の面を付けているため、若いのか老いているのかはわからない。しかしその立ち振る舞いから察するに、小人たちの長であることに間違いはない。

「ここへ何しに来たのだ？」

低く唸るような声で、王を威嚇する。王が剣から手を離し、構えを解いても小人たちは武器を下ろさない。

「勝手にお前たちの領地へ入ったことは謝る。しかし私はここに用

があるわけではない」

「ならばどこへ行く？」

「竜の神の元へ」

その言葉を聞くと、他の小人たちも王に向かってゆっくりと踏み込んだ。

「そうか。やはり黙って通すわけには行かない。あんたに恨みはないが、これも試練じゃと思うてくれ」

小人の長が手を振り上げると、弓を構えた者たちが一斉に矢を放った。無数の矢が王に向かって降り注ぐ。王が身を避けるほうが早く、矢は全て大地に突き刺さったのみだった。

王は上手に位置する小人の群れに飛び込んだ。小人たちは新しい矢を引く間もなく、次々と切り倒されていく。下手より矢が飛んでくることもない。仲間当たることを恐れているからだ。

それならばと、槍を持つ者が王に向かって襲いかかった。槍とて矢と同じ、一定の距離を保っていなければ、威力を発揮することはできない。王は華麗に宙を舞い、瞬間的に間合いを詰めて、小人たちを退けていく。上手の者たちが全て切り倒されると、下手の者が弓を構え、矢を引き絞った。そこで長が声を上げた。

「それまでじゃ！」

小人たちは構えを解き、武器を下ろした。しかし納得したわけではなかった。長のそばにいる者が口を開いた。

「しかし長老、奴は我らの仲間を……」

「案ずるでない。このお方は一人も殺めてはおらん」

「えっ……」

長の言うとおり、倒された者は皆、絶命したわけではなく、気を失っているだけだった。長老と呼ばれた男は木の面を外し、王に軽く会釈をした。長老と呼ばれるにふさわしい深い皺を顔中に刻み、立派な白い髭を蓄えていた。

「一つお答え下され。何故、竜の神に会いなされるおつもりか？」

「愛する民を、国を、列国の支配より守るため、竜の神の力が必要

なのだ」

「己の命を失っても？」

「失うことはない。手足をもがれ、身を引き裂かれ、例え魂だけとなっても私は竜の神に会わねばならぬ」

王の言葉を聞き、長老が優しくそして静かに微笑みを洩らした。

「ヴァルザニアの王の名に恥じぬ、力強きお言葉。試練はまだ始まったばかり。用心しなされ」

長老が木の面を被ると、小人たちの姿は景色に同化するかの如く、音もなく消えていった。

王は迷うことなくひたすら頂きを目指した。山へ入って幾日目の夕刻のことだった。

突然、轟音と共に大地が激しく震え始めた。馬が落ち着きをなくし、いななきと共に暴れ始める。バランスが崩れ、馬体が傾く。振動のためではなく、馬の脚が地に飲み込まれているのだ。それでもどうにか馬を進めようと王は鞭を入れるが、効果はなかった。

(このままでは……)

王は掴めるだけの荷を手にして、馬を捨てた。苦渋の選択であった。

大地の揺れは未だ留まることを知らない。立っていることさえままならぬ揺れに、王は膝をつき、悲しげな目をして地中へ消えていく馬の姿を見つめていることしかできなかった。

揺れが収まり、山は静けさを取り戻した。長い道のりを馬なしで進むことがどれほど酷であるか、王には見当さえつかなかった。

しかしここで投げ出すわけにはいかない。王が荷を担いだ瞬間だった。

目の前の地面が勢いよく隆起した。四方八方に土を跳ね飛ばし、巨大な生物が姿を現した。全身が黒い毛に覆われており、二本の足

で立っている。身の丈は十尺（約3m）を超えると見え、かつて狩りに出たとき、目にした野生の熊でさえ王には赤子に思えた。

口元に生える長い牙に唾液を滴らせ、不気味な赤い目で王を見据えている。王が剣を抜くと、獣は雄叫びを上げながら王に襲いかかった。鋭い爪を備えた右手が王に向かって振り降ろされた。

王は素早く身を動かしてそれを避けたが、甲冑には三本の爪跡が刻まれた。幸い身を切られるところまではいかなかったが、獣は休むことなく、次を仕掛けてきた。爪が風を切る音が共に、立ち並ぶ樹木が裂ける。

獣はその巨体に似つかわしくない素早さで王を追い詰めていく。

（このままではいずれこちらがやられてしまう）

しかし反撃へ出ようにも、長い爪をもつ獣の間合いは広く、剣の届く位置までうまく接近することができない。矢を放とうにも弓を構える暇さえない。

（長い爪……そうか！）

王は剣を鞘に戻し、乱立する樹木の前に立った。王に策があることなど知らぬ獣は、動きを止めた獲物を恰好的のどばかりに爪を振り降ろす。王はすんでのところでそれを交わした。後ろの樹木が幹をえぐり取られ倒れ始めた。他の樹木に寄りかかったため、地に付くまでには至らなかつた。

王は剣を抜くこともせず、無防備な態勢のまま、別の樹木の前に立った。獣は唸り声を上げながら赤い目で王を睨む。

「どうした？ もうかかって来んのか？」

王が両手を広げて獣を挑発する。獣は言葉が理解できるらしく、これまでも増す素早い動きで王に襲いかかった。しかし爪は別の木の幹をえぐり取っただけだった。

「終わりか？」

王は嘲笑を浮かべながら、獣に向かって手招きをする。獣は理性を失ったかのように両腕を振り回すが、王は涼しげな顔でそれをこごとく交わしていく。

繰り返し山の中に木霊する、爪が風を切る音と樹木の幹が裂けて傾く音。

あれほど激しく暴れ回っていた獣が突然、動きを止めた。倒れることなく互いに支え合った樹木が獣の周りに檻を作っていたのだ。それでも獣は王の体を切り裂こうと手を上げたが、樹木に阻まれ思うようにいかない。もはや獣になす術はない。

王は獣の懐へ飛び込み、胸に剣を突き刺した。赤茶色の血が吹き出し、体を覆う黒い毛を伝い始めた。獣は最後の雄叫びを上げながら、前のめりに倒れた。そして樹木に寄りかかるようにして、息絶えた。

「許せ。これも我が国と民のため」

王は獣の血を振り払った剣を鞘に納めると、荷を担いだ。もう馬はない。これより先は歩いて進むしかないのだ。数歩進んだところで王は軽い眩暈を感じた。立ち止まって頭を振った後、辺りへ視線をやってみた。

先程と何も変わらぬ風景。

（気のせいか……）

苦笑いを浮かべた瞬間、再び眩暈が王を襲った。目の前がグルグルと回り、天と地が逆になる。王の体が倒れるより先に、意識は遠退いていった。

小鳥のさえずりが聞こえる。

試練しかないと思っていたこの山にも安らぎがあったようだ。

いや、小鳥のさえずりはいつも聞こえていたのだ。それだけではない。木の葉が風にそよぐ音や川のせせらぎも……。

ただ王はそれに気付いていなかっただけだ。

背中に伝わってくる柔らかな感触。体中を包み込み、心まで癒してくれそうな優しさがある。初めて知るものではない。ずっと昔から感じることでできていたもの……ただ、今の王にとっては懐かしいもの。

ベッドの上だった。木の丸太を積み上げて作られた部屋の中、甲冑は脱がされ、武器や食料などの荷もどこにも見当たらない。王はベッドから飛び降りて、窓を開いてみた。

驚くことにそこには美しい緑の草原が広がっていた。

(ここは本当にあの竜の山か……)

背後で扉の開く音がした。王は素早く振り返り、身構えてはみたものの、すぐに動けなくなってしまった。

「目を覚まされましたか？」

透き通るような白い肌に、艶やかな茶色のロングヘア、長い睫毛と二重の瞼に守られたエメラルドの瞳、すつと通った鼻筋……世にも美しい女性がそこに立っていたのだ。決して煌びやかなドレスや宝石で着飾っているわけではない。綿で織られた衣服を身につけているだけに気品に満ちた女性だった。

しかし王の体を縛りつけたのは、それだけが理由ではなかった。

「ソフィア……」

王が思わず口走ったその名に、女は首を傾げた。

「はい？」

「いや、すまない」

(そんなはずはない)

王は自分の考えを自ら否定し、女に向き直った。

「あなたは？」

「私はサンドラ。あなたが森で倒れているのを発見して、ここへお連れしたのです」

「そうだったのですか。それはかたじけない」

「いいえ、お気になさらずに。それより食事を用意しております。

大したものではありませんが、少しくらい足しになるかと」

サンドラの言葉通り、テーブルに並んでいた食事は質素なものだった。しかしほのかに漂ってくるパンと野菜スープの香りは嗅ぐだけでも、食欲を刺激された。テーブル中央のバスケットに盛りられたオレンジの皮は、太陽のように眩しく輝いている。

王が食事に手を付けずにいると、サンドラが優しく微笑んだ。

「ご心配なく、毒など入っておりません」

「いや、そういうわけでは……」

それでも王が動かないため、サンドラは自分の皿と王の皿を入れ替え、パンとスープを一口ずつ食べてみせた。「いかがですか？」と言って、もう一度微笑んだ。そこまでされて、王も食べぬわけにはいかず、そつとパンに手を伸ばした。

「ここにお一人で住んでおられるのですか？」

「はい」

「それはまた遅いことだ」

「そんなことはありません。女一人食べていくくらいどうにでもなります」

「そんなものですか？」

「ええ」

王はスープにも口を付けた。味は申し分がなかった。確かに毒は入っておらぬようだ。

「そう言えば、私の武器や荷物はどちらにありますか？」

「それなら心配には及びません。大切に保管しております」

「そうですか。それなら良かった。しかし大変だったでしょう。私を背負ってここまで来るのは」

「いいえ。実を言うと……少し引き摺ってまいりましたから」

上品に笑うサンドラの美しさに王の心が少しずつ乱れ始めた。

「しかし武器や荷物までとなれば、かなりの重労働だったでしょう？」

「数回に分けて運びましたから」

「そうですか……やはりあなたは遅い人だ」

「女に遅いのは褒め言葉にはなりませんわよ」

サンドラは悪戯っぽく言い放ち、じっと王を見る。

(仕草まで似ている……しかし……)

「これは失礼をした。どうかお許しを」

王が胸に手をお当て、大袈裟に頭を下げると、サンドラはまた微笑んだ。

「ところで、あなたはどのようにしてあのような所に倒れていらしたのかしら？」

サンドラがバスケットからオレンジを一つ掴み取り、ナイフで皮を剥き始めた。

「旅を続けております」

「旅？」

「はい。山の頂きを目指しております」

「頂き？ そこに何かあるのですか？」

「はい。希望があると聞きます」

「希望？ まるで詩人のような言い回し。たった一人で試練を乗り越えて、頂上を目指すとあれば、恐らくとても価値のあるものなのでしょうね」

王は静かにスプーンをテーブルに戻した。

「美味しかった。ありがとう」

「オレンジも召し上がって下さい」

「いいえ、これ以上は……私も先を急ぐ身ゆえ、長居をするわけにはいきません。荷物はどこに……」

「お待ち下さい！」

席を立ち、部屋を出ようとする王の前にサンドラは立ちはだかった。そして王の胸にその体を預けた。

「先程は、女一人食べていくくらいどうにでもなると申しましたが、あれは嘘なのです。本当は心細く、いつ自ら命を絶とうかと思っていたところです。どうか、このままそばにいて下さいまし」

サンドラはそのエメラルドの瞳を濡らしながら、必死に訴えかける。

(ソフィア……)

ソフィアとは亡くなった王の妻だった。サンドラはソフィアと瓜二つ。王はその姿に亡き妻を思う。

「お願いでございます。数日、いいえ、今宵だけでも構いません」
王の腕を掴むサンドラの両手に力が入る。

「どうしても行くというのであれば、ここで私の命をお絶ち下さい」

自分をじつと見据えるサンドラの目に、王はその覚悟が真であることを知った。

「あい。わかった。ただし、今宵だけだ」

サンドラの顔に光が差した。

「真にございますか」

王は静かに頷いた。「ありがとうございます」と何度も繰り返して、サンドラは王の胸の中で泣いた。

夕食を終えて、王がベッドで横になっていると、静かに部屋のドアが開いた。サンドラだった。窓から差し込む僅かな月灯りでさえ、彼女が一糸纏わぬ、生まれたときと同じ姿であることはわかる。王は体を起こしてベッドに座り直した。

「生憎ベッドは一つしかなくて……そばに行かせていただいても構いませんか？」

その言葉の意味するところは、もちろん、王にもわかっていた。

静かに頷いた王のそばへサンドラは腰を下ろした。美しい曲線を描く彼女の裸体を目の前にして、胸中穏やかでいられる男はいないだろう。サンドラが王の耳元でそっと囁いた。

「今宵だけは私を亡くなった奥方様と同様に愛して下さいませ」

王の指がサンドラの頬を伝い、耳に触れ、そして長い髪へと這っていく。

「いいとも」

王はサンドラの小さな肩を抱いてベッドへ寝かせると、自分が上になった。彼女の唇に自らの唇を重ねるため、ゆつくりと顔を近づけていく。サンドラは待ち切れず、王の首の後ろへと両手を回した。その瞬間、サンドラが大きく目を見開いた。口から吐き出した赤い血が唇を伝い、ベッドに滴り落ちた。

王の隠し持っていたナイフがサンドラの胸に突き刺さっていた。ブーツの底に仕込んであったものだ。

「なぜ……」

「お前がまやかしの術を使う魔女であることは見抜いておった」

全てはサンドラの言葉からだ。サンドラは王を引き摺って運んだと話したが、あの細い腕で重い甲冑を身につけた王を一人で運ぶのは不可能だ。武器や食料も女にとっては決して軽いものではない。

旅をしていると言ったが、「たった一人で試練に立ち向かって

いる」ことは話してはいない。

そして「亡くなった奥方様と同様」という言葉。なぜ王に妻があり、命を亡くしたと知っていたのか。

「ソフィアの姿を真似て、私を惑わすとはな……」

サンドラが呻き声を上げ、その美しい体から肉が落ちていく。至るところに皺が刻まれ、皮膚が落ち、骨だけの醜い姿に変わった。やがて骨さえも解けるように蒸発し、ベッドや丸太小屋、美しい緑の草原も姿を消した。

再び辺りは鬱蒼と樹木の茂る森へと戻っていた。王の武器と甲冑、荷はその傍らに転がっていた。

（頂きはまだか……）

王は額の汗を拭い、深い溜息をついた。

城を発ち、山へ入って既に幾日過ぎたのか。

もはや王にもわからなくなっていた。体は日増しに重くなってゆき、食料も底をついていた。野草や蛇さえ見当たらず、空腹を満たすものは何一つなかった。

あれほど茂っていた草木はどこにも見えなくなり、辺りはいつしかひび割れた大地と、風に吹かれて不気味に踊る枯木だけになっていた。

（あれは……）

王の視線の先に行くつもの岩が連なり、壁を作っていた。中央が大きく開いており、中へと道が続いている。

（あの中に竜の神はおられる）

誰かにそう教わったわけでもなく、わずかな確証さえないが、王はそう感じていた。

わずかに気を楽しにした王の前に、ドス黒い霧が立ち込めた。突風

が吹き、霧が晴れると、不気味なものが宙を漂っていた。大釜を手
に持ち、黒装束を身に纏った人骨……言わずと知れた地獄からの遣
い『死神』であった。

「よくここまで辿り着いたものよのう」

死神はヒツヒツヒツと甲高い声で不気味に笑った。

「既に察しはついておるだろうが、竜の神はあの洞窟の中におる」

「貴様が最後の試練か？」

王の問いに対し、死神は再び不気味に笑う。

「そうと言えば、そう。否と言えば、否。俺も神の端くれ。竜の神
の下僕とは違う。俺の目的はここでくたばる人間の魂をいただくこ
と。奴のためではなく、俺自身のためにな」

「そうか。しかしお前が何者であろうと、私には無関係だ。邪魔立
てする者は斬る」

王が鞘より剣を抜いた。

「ヒツヒツヒツヒツ。勘違いするな。お前の敵は俺ではない」

「何？」

「気が付かぬか？ まあ、無理もない。お前の眼には見えぬからな
王は体が突然、鉛を乗せられたように重くなるのを感じた。肩か
ら足の先まで……全身が大地へと吸い込まれていくかのようだ。

「これは……いったい……」

「死霊共さ。お前を地獄へ連れて行こうと寄って来たのだ。俺には
よく見える。背中と腰の辺りに一人ずつ、両腕、両足に二人ずつ」
死神の甲高い声が木霊する。王は死霊共を振り払わんと、身を激し
く揺さぶったが、まるで効果がない。右手から剣が抜け落ちた。

「そやつらは『生きていたい』という思いが強い奴ほど好物なのよ。
そう、お前のようにな」

死神の言葉通り、王がもがけばもがくほど、死霊共の力は強くな
ってゆく。しかし抵抗を止めれば、そのまま地獄行きだ。

王の膝が曲がり始めた。実体がないにも関わらず、なぜこれほど死
霊共は重いのか。恐らく現世に残した悔いや恨みが力を生み出して

いるのだろつ。

ついに王の膝が地についた。死霊共のそのまま王を押しつぶそうと一層力を増す。上半身が前のめりになる。倒れてしまわぬよう、王は両手を地について体を支えたが、震えが強くなり、肘が曲がる。(これまでか……)

その瞬間、王の頭の中にある光景が見えた。

まだ幼き息子アデルの寝顔、天に向かって勇ましく剣を掲げるヴアルザニアの兵士たち、笑顔に満ち溢れた街の人々……。

そこへ姿を現した異国の侵略者たち。人々の悲痛な叫び声が木霊する。兵士たちは体中に傷を負い、次々に大地にひれ伏していく。侵略者の刃はついにアデルへ振り降ろされた。

王の目の前が真っ赤に染まった。

(私が死んだら……ヴアルザニアはどうなる)

「又オーツ！」

王が雄叫びと共に体中に力を入れた。両手で体を支えながら、右足を立てた。右膝と、左足の爪先を伸ばそうとする。

「死んではならぬ……死んではならぬのだ」

食いしばった歯から血が零れる。死霊共は更に力を込めたが、王の執念がそれを上回り、ついに王は立ち上がった。足元にある剣を拾い上げ、大地に突き刺した。剣を支えにし、膝を震わせながら、死霊共を引き摺って足を前に出した。

ゆっくりとだが、一歩ずつ確実に洞窟へと向かって進んでいく。

そのうち一人、また一人と死霊共が姿を消していった。洞窟の入口に辿りつく頃には王は自由の身となっていた。その様子を見ていた死神は体を震わせた。

「なっ、なんとという精神力……死霊共が手を引きおったわ」

死神は自らの思惑が外れてしまったことをむしる楽しんでいた。

「まあ、良い。いずれまたお前とは再会することになるろ。そのときを楽しみに待っておるぞ」

死神は不気味な笑い声を残しながら、その姿を霧へと変え、王の

元を去っていった。

王は洞窟の中へと足を進めた。空気は冷たく、凍えてしまいそうなほどだ。両側の岩壁には突き刺さった松明が、行く先を延々と照らしている。それはあたかも人の手によって作られた物のようだった。

「ハッ！」

洞窟の奥まで進み、王は目にした光景に思わず声を上げ、息を飲んだ。先頃、王の命を狙った赤目の獣など比べるに足らぬほど、巨大な生物がそこには横たわっていた。

頭から尾までを覆う、いかなる攻撃をも跳ね返してしまいそうなほど頑強に見える黒い鱗。背中に備えた堂々たる翼は、強風や突風を一切寄せ付けず、空を自由に我がものにできるであろう。青い瞳は宝石のように美しく輝き、この世の全てを見通してしまいそうなほど澄んでいる。

王の目の前にいるのは、言うまでもなく竜の神であった。

王の姿を見た竜の神はその長い首を高く持ち上げ、低く張りのある声を出した。

「ここまでやって来る人間が真におるとはな」

王はその場に片膝をつき、右手を胸に充てた。

「私は……」

「良い」

王の言葉を神が遮った。

「何も言わずともわかっておる。そなたはヴァルザニアの王。国のため、民のため、私に力を借りに来たのであるう？」

「ハッ。おっしゃる通りでございます」

「うむ。そなたの勇ましき姿、存分に見せてもらったぞ」

これでヴァルザニアは救われる。王はそう思っていた。しかしま

だ胸を撫で下ろすには早過ぎた。

「そなたに最後の試練を言い渡す」

「最後の試練？」

「いかにも」

「どのようなことでございましょう？」

「そなたの命を私に捧げよ」

王は自らの耳を疑った。何ということか。ここまで「死んではならぬ」と必死に守り通してきた命を最後の最後で「捨てよ」というのか。

「どうした？ できぬか？」

神の問いに王は静かに笑った。

「いいえ。城を発ったときより、この命を捧げる覚悟はできております」

竜の神に会うという目的を達した今、王にとって命を守る必要はもうない。

「私ごときの命でヴァルザニアが救われるのであれば、喜んで差し上げましょう」

「うむ。よくぞ申した。それでこそ、真の勇者。案ずることはない。ヴァルザニアの未来、確かに私が預かった」

「これで思い残すことはございません」

王の言葉を聞き届け、神の青い瞳が黄金に輝いた。その眩さに王は目を閉じた。

(さらば、我が祖国ヴァルザニア。さらば、我が息子、アデルよ…)

ヴァルザニアでは、未だ帰らぬ王の身を案じ、国中が騒然としていた。それどころか「王は既に命を落とした」と、根も葉もない噂まで流れる始末だ。

誰もがそれを否定し、信じたくない気持ちを抱いていたが、決定的な証拠もなく、はっきりと、「王は生きている」と言える者は一人もいなかった。

王をただ一人で試練へと立ち向かわせたことをデームは誰よりも悔いていた。

「あの老いぼれが余計なことを申しただけに」と、彼を口汚く罵る大臣も少なくなかった。幼きアデルが上げる泣き声ですら、自分を責めているような気がして、デームの心は打ちひしがれていた。何よりも恐れるは、「王が死んだ」という吹聴が他国へ知れ渡ることであった。

そしてその懸念は真のこととなった。

大臣たちが今後の政について話し合いの場を持っているところへ、一人の兵が飛び込んで、息を整えることもせず、声を響かせた。「大変にございます。コルドの……コルドの軍勢が攻めてまいりました！」

「何と！」

大臣たちが一斉に立ち上がった。

「恐れていたことが……」

一人呟くデームを置き去りにして、他の大臣たちは急ぎ足で部屋を出ていった。

コルド軍の突撃隊長であるダミアンは、後に続く兵士たちに檄を飛ばした。

「ヴァルザニアに王なし。一気に城を攻め落とし、ここを我らが進撃の拠点とする。真の目的はプロメキアとガザールを落とすこと。この戦はそのための足掛かりに過ぎぬ。皆、わかっておろうな！」

兵士たちは剣を天高く掲げ、雄叫びを上げる。

「よし、撃て！」

ダミアンの言葉を合図に、大砲が火を噴いた。

轟音がとどろき、鉛の玉がヴァルザニアの街を守るレンガ造りの壁に突き刺さった。赤茶色のレンガがボロボロと崩れ落ちる。

「一か所を集中的に撃ち、壁をぶち壊せ！」
再び轟音と共に打ち出される鉛の玉。衝撃で壁がうねる。

コルド軍の位置しているのは、ヴァルザニア軍の大砲の射程距離を大きく逸れたところだった。武器にかけてはやはりコルドのほうが進歩している。

しかし自分たちから門を開き、外へ飛び出していくのもあまりに危険が大きすぎる。ヴァルザニアの守備隊長であるリオネルは、敢えて壁を破らせ、攻め込んできたところを一気に叩くという策を選んだ。

砲撃の音を聞いた街の人々は皆、家の中へ閉じこもって息を潜めた。武器を手にした敵兵の前では何の役にも立たぬことを知りながらも、扉や窓の鍵を掛けることは忘れなかった。

四度目の砲撃で、壁の一部に巨大な穴が開いた。

「あの壁の綻びより中へ入り、門を開けよ！」

第一突撃隊の兵たちが我先にと一斉に馬を走らせた。蹄が大地を蹴る音が地鳴りのように響き渡る。迫り来る軍勢を前に、リオネルが自軍の兵たちを活気づける。

「我々の誇りに懸け、一歩たりとも敵を入れるでない！」

兵たちは壁の割れ目より、一斉に矢を放つ。進行してくる方角が一つのため、的は絞り易い。馬を射られたコルドの兵たちはバランスを崩し、鞍より落下する。後続の兵たちもそれに巻き込まれて転倒していく。

「休むな！ 次を射よ！」

兵たちは立て続けに矢を放つ。しかしコルド軍の進撃を止めるには至らない。軍勢は目の前に迫っていた。

「やむを得ん。外へ飛び出し、応戦せよ」

リオネルが右手を振り降ろすと、兵たちは壁の綻びより飛び出し、剣を抜いた。

おじけづいて、逃げ出す者は一人もいない。誰もがリオネルの言う「兵としての誇り」を持っていたからだ。

「王が戻られるまで、我々でヴァルザニアを守れ。良いな！」

しかし誇りだけでは戦に勝つことはできなかった。

コルド軍の数の多さと兵としての熟練度の高さに、ヴァルザニアの兵たちは次々に倒されていった。

そしてついに街への侵入を許してしまった。

「俺が一番乗りだ！」

言葉通り、一番に街へ入ったコルドの兵が歓喜の雄叫びを上げた。そして他の兵たちも街の中へ雪崩れ込み、そのまま城門へと向かった。城門の守備はより一層厚いものだったが、コルドの兵が馬上より繰り出す槍にヴァルザニアの兵たちは苦戦した。

防戦一方のヴァルザニア軍の隙をつき、コルドの兵たちは閉ざされた堅い鉄の扉を開くことに成功した。

その様子を遠くより窺っていたダミアンは高らかに笑った。

「門は開かれた。全軍、城を目指せ！ 街人には手を出すでないぞ

！ 奴らは将来の戦力となるからな。但し、逆らう者は殺して構わん！」

コルド軍の全ての兵たちが前進を始めた。ヴァルザニア軍の抵抗をあつさりど払い除け、街の中を我が物顔で走り回る。いくつもの悲鳴と血飛沫が上がり、ダミアンの勝ち誇ったような笑い声が木霊する。

コルド軍の侵攻は、城に繋がる湖を跨ぐ橋へと達した。ヴァルザニア城にとって最後の砦であるここを突破されれば、城の陥落も時間の問題であった。

「もうダメだ」

城より戦況を見守っていた大臣の一人が膝をついた。項垂れる者や両手を組んで天に祈る者もいる。

デイムは静かに目を閉じ、王に謝罪した。

「王よ。お許しください。我々は貴方の帰りを待ち切れなかった」

「何としても橋を守り切れ！」

リオネルは枯れそうになる声を必死に絞り出した。しかし無情にも、彼の目の前で、自軍の兵たちは地に平伏していく。

(かくもあつさりと落とされてしまうとはな……)

リオネルの前にダミアンの駆る馬が迫っていた。ダミアンは構えた槍を頭上で勢いよく振り回す。

(もはや、これまでか……)

リオネルが覚悟を決めた瞬間だった。四方八方より一斉に声が上がった。

「なっ、何だ！ あれは？」

コルドもヴァルザニアも関係なく、誰もが空を見上げている。リオネル、ダミアンもそれに倣った。

黒い鱗に覆われた体、背中に備えた巨大な二枚の翼、美しい輝きを放つ青い目。

「竜だ！」

一頭や二頭ではない。数十頭の竜が群れとなってヴァルザニアの空を舞っている。大地を揺るがす声を上げ、竜たちがコルド軍に襲いかかった。長い尾を振り回せば、兵を蹴散らし、翼を羽ばたかせれば遠くへ吹き飛ばす。最も強烈なのは口から吐き出す炎で、人間であれば、一瞬にして燃え尽きて灰になってしまう。

鱗は堅く、矢は突き刺さることなく弾かれ、鈍ら刀では引つ掻き傷さえ負わせることもできない。

「ええい、怯むな！ 城は目前。前進あるのみぞ！」

ダミアンが再び槍を構えたところへ、一頭の竜が急降下で空から襲いかかり、馬ごと地面へ押し倒した。鋭く尖った後ろ脚の爪が甲冑を貫き、ダミアンの心臓を鷲掴みにしていた。身の丈が六尺を超える黒い竜は、長い首を振り回し、辺りに炎を撒き散らした。

リオネルは初めて間近で見るとその雄々しい姿に戦慄していた。

竜の圧倒的な強さと指揮官を失ったことにより、コルド軍は撤退を開始した。

リオネルは深追いせぬよう兵たちに告げたが、竜の群れはヴァルザニアの上空を旋回し、いつまでも睨みを利かせていた。

「王は……竜の神の元に辿りついておられた」

デームが声を震わせ、静かに涙を流した。

「では、いずれ、王は帰って来られるのでしょうか？」

「おお、そうに違いあるまい」

「さすがは我らがヴァルザニアの王！」

胸を躍らせているのは、皆、同じであった。微笑み、肩を抱き合い、王の勇気を称え、帰りを心待ちにした。

突然の侵略より国が守られたことに街人たちも湧き立っていた。扉を開き、外へ飛び出し、踊り、唄い、宴を催した。

竜に守られたヴァルザニアはもはや他国の侵略に怯えることはなくなつた。この平和は永遠に守られていく。誰もがそう信じて疑わなかつた。

しかしこの勝利が、いずれヴァルザニアの未来を大きく変えていくことになることは、誰の想像にも及ばなかつた。

そして王も二度と帰らなかつた。

序章 - 6 - (後書き)

これにて序章は完結。いよいよ次回より本編がスタート致します。
読んでくださっている皆様、誠にありがとうございます。

ここまでの感想が何かあれば、是非お願いします。

一言でも結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4264w/>

竜の導き

2011年10月3日03時35分発行